

幼児の依存性に関する研究*

—依存性と親の養育態度および従順性の相互関連について—

お茶の水女子大学 津 守 真
愛育研究所 稲 毛 教 子**

問 題

1 依存性の発達

生まれて間もない乳児は、欲求を充たすのに、他人の助力を必要とする。空腹になつて乳を欲する場合にも、乳児は自分でその欲求を充たすことができず、母親が近くよつて来て、抱き上げ、乳を与えてくれるのを待たなければならない。このように母親を媒介者として、乳児の欲求が解消されることがくり返されると、乳児にとっては、母親自身が欲求の対象となってくる。すなわち、母親に近くに来てもらうこと、母親に抱き上げてもらうことが欲求となる。依存性(dependency)はこのようにして発生する獲得欲求である。

発達年令的というならば、すでに生後1か月で、「母親に抱かただけで泣き止む」（最初は、乳を与えられなければ泣き止まなかつた）2か月で「泣いているときに、人が来ると泣き止む」6・7か月になると「部屋にだれもいなくなると泣き、要求があると声を出しておとなの注意をひく」。この段階になると、明らかに母親に依存することが欲求となつている。(津守・稲毛, 1959)

乳児の依存の欲求があらわれたとき、母親がそれを充たす程度には個人差がある。子どもが母親を傍においておきたいと思うときには、いつでも傍にいて相手をしてやる母親もあるし、逆に、いつも拒否する母親もある。それらの事情に応じて、依存性にも個人差が生じてくる。

依存の行動としては、従来の研究者により、次の5つがほぼ一致してあげられている。(1) 身体的接触 (2) 母親またはおとなが近くにいること (3) 注意をひくこと (4) 承認をうること (5) 困難にであつて助力を求めることである。

* A study on dependency of children —Relationship of dependency, compliance and parent's attitude—
** by Tsumori, Makoto (Ochanomizu University) & Inage, Noriko (Aikyu Research Institute of Child Welfare)

とである。

2 依存と独立

依存行動が学習される行動であると同様に、独立行動(independence)もまた、学習される行動である。依存でないことは、独立的であることと同じではない。独立行動が成立するためには、独立的にふるまつたときに、それに賞があたえられなければならない。すなわち子どもが自分で周囲の事物を探索することによつて満足を得、障害にぶつかつたときに、その障害を成功感をもつて克服するときに、独立行動が成立する。そのときに、子どもが環境を探索し、障害を克服しようと試みることに對し、周囲のおとなが危険をおそれて、不安を示す場合には、独立行動は学習されない。独立行動に對して、親が賞をあたえることが独立行動の成立のために必要であり、親の承認をうるという依存的関係がここに予想されている。そこで、依存行動と独立行動とはかならずしも矛盾するものではなく、むしろ、依存行動を成立させやすい条件がそのまま、独立行動を成立させやすくしている場合もあると考えられる。

独立行動に関しては、研究者によつてかならずしもその内容は一定していないが、次のようなことがふくまれる。(1) 遊びや仕事から満足をうること (2) 生活習慣をひとりですること (3) 障害を克服すること (4) 自発的にすること (5) 仕事を終りまで完成させることなどである。

この点について、Heathers, G. (1955) は、タイムサンプリングにより、2～5才児の観察の中で、依存性と独立性について記録し、依存行動と独立行動について、相互相関表をつくると、あるものは正の相関、あるものは負の相関であることを示している。すなわち、依存と独立はかならずしも、同一次元に比較されるようなものではないことを示している。

依存性と独立性の間の相互関係をさらに明らかにしようとしたのは、Beller, E. K. (1955) である。かれによれば、依存と独立 (Beller は autonomous achievement

striving といっている)とは負の関係に立ち、依存度の高いものは、独立度が低く、独立度の高いものは依存度が低くなるが、しかし、依存の欲求を生む親の態度が、同時に、子どもが自分で環境を探索し、支配することに対して賞を与えてゆくなれば、独立行動の成長をも助け、2つの欲求は相矛盾するものではない。そこで、Beller は、セラピー実施中の3～5才の幼児について、依存性と独立性についての評価をもとにして、依存度と独立度との相関をとつたところ、 -0.53 であり高い負の相関が認められ、依存性と独立性は両極概念でないことを示している。

3 依存度を規定する条件と親子関係

依存性の度合に関係のある条件として、次の2点が考えられる。すなわち、(1) 依存行動に反復、賞が与えられて、強化されると、依存の欲求は強くなる。すなわち子どもの依存の欲求を親がうけいれ、承認すれば、依存の欲求はある程度強くなる。(2) 依存の欲求が成立した後、依存の欲求が満たされず、ある程度のフラストレーションを経験すると、依存の欲求はいつそう強くなる。すなわち、親が依存の欲求を拒否し、罰をあたえると、依存の欲求は強くなる。この点についてはさらに詳しく検討してみる必要がある。

Stendler, C. B. (1952, 1954) は、過依存の子ども (overdependency) の生活史から、過保護のみが過依存の原因ではなく、発達の critical periods において、養育者との関係が乱される場合に過依存になることを示している。かれによれば、critical periods は2つある。第1の時期は、9～13、4か月のときで、この時期に乳児は依存の欲求が満たされるための一連の期待系をもつ。この期待系が家庭内の事件などにより急激に変化すると、そこに生じた不安の解消のために、過依存という方法によって解決しようとする。第2の時期は、2～3才で、この間に子どもに対する社会の要求が変化し、これが急激に生ずると、不安をひき起こし過依存と結びつく。かれは、18の小学校の1年生360名の中から、過依存の子ども20名を選択して、その生育歴を分析したところ、過依存児20名の中、6名は過保護+独立行動の阻止によるものであったが、残りの14名は過保護の徴候はなく、その中11名は critical periods に事件を起こし、多かれ少なかれ家族内に養育者の移動があつたことを示している。

Sears, R. R. (1953) は、40名の幼児について、タイムサンプリングによる観察によつて、依存行動と攻撃行動について観察記録をとり、教師の評価も併せ、他方、親の面接によつて、現在と過去の育児態度について評価

し、それによつて、フラストレーションと依存の欲求とは正の関係に立つことを示そうとしている。その結果によれば、授乳のさいのフラストレーション(規則授乳と急激な離乳)と依存性との相関は、女 $.55$ 、男 $.35$ である。また、現在の non-nurturance (就寝時の接触度、母が忙しいときに、子どもの要求をいれる度合、子どもがびつくりしたときの母の態度、父の養育度)との相関は、男 $.24$ 、女 $-.40$ で性差が認められている。また罰との関係を見ると、ある程度までの罰は依存度を増加させ、それ以上の罰が加えられると依存度はかえつて減少する。

依存の欲求の強さと、その充足あるいは、フラストレーションとの関係は、Gewirtz, J. L. (1956, 1958) により、実験的に追求されている。Gewirtz の実験では、おとなのいる部屋でイーゼル (easel) に好きなだけ絵をかくという場面である。そこで、おとなが子どもの要求にこたえる度合 (availability of the adult) が大であると、子どもがおとなの注意をひく傾向は小であり、逆におとなの availability が減少すると、注意をひく傾向 (attention-seeking) は増大することが示されている。

Hartup, W. W. (1958) は、実験的に nurturance group (実験者が一貫して子どもと遊ぶ) と、nurturance-withdrawal group (実験者は突然いつしよに遊ぶのをやめる) とをつくり、その後で作業課題をあたえて、その作業量を比較している。それによると、nurturance-withdrawal のグループの方が作業量が大で、誤りが少ない。すなわち、おとなの注目をひき、承認を求める傾向が大であるために、作業量が増加するのだと考えている。

4 依存性と同一化

同一化 (identification) とは、子どもが親を単に模倣するだけでなく、親の規準をとりいれて、それを自分の行動の規準とする過程である。その過程において、依存性の強い子どもは、母親を喜ばせることを多く考え、母親がいないときには母親の慰めのことばなどを想像することによつて母を近くに感ずることができるであろう。これらの関係については、従来の研究も、十分とはいいがたいが、Sears, R. R. (1957) は、379名の5才児の面接による研究において、この点を考察している。それによると、母親が子どもをうけ入れる度合の高い方が子どもの良心の発達がよく(同一化の度合が大であり) また母親が愛情的であつて、しかも、しつけの手段として愛情を奪うことが多い場合、(かわいがつてあげませんよというような場合) 良心の発達が大きい。

以上の諸点が本研究の問題点であり、従来の研究の要約である。本研究においては、依存性の発達の初期であ

る幼児期1～3才までを主対象として、上の点を確認し、さらに追求しようとするものである*。

研究 I

目的： 依存的行動の発生の初期と考えられる1・2才児を対象として、依存性の個人的傾向を明らかにし、また、依存的行動と独立行動との関係を検討する。

とき： 1958年2月～5月

被験者： 1才3月～2才11月の幼児30名、内1才台13名、2才台17名で、男女別にみると、男児20名、女児10名。社会経済状態は高く、父は2名を除いてすべて大学卒、母は19名大学専門学校卒、他は高女卒で、著しく知識階級が多い。

方法： 依存性を適確にとらえるために、いくつかの方法を併用する。

(1) 実験場面における観察 母と子どもに来てもらい、一室でいつしよに遊んでもらって、その間の母子の行動を記録する。部屋には玩具を豊富に出し、どの子どもの場合も、一定の配置で並べてある。母親のためにはいすと、書物が数冊用意してある。母親には、子どもの遊びのようすを記録したいからと告げ、家にいるのときできるだけ同じようにふるまうよう頼む。

記録者は2名で、1名は子どもの行動を観察し、他の1名は母親を適当に導入してから、母親の行動を記録した。そして記録は、1分ごとにきぎつた。

観察時間は1回30分で、約1か月をへだてて、2回目を行なう。また観察終了後、約30分母親といろいろ話し合い、家庭での状況、育て方などについて話す。

(2) 質問紙 子どもの依存性および、依存性に対する親の処置のしかたについて、12問より成る質問紙を作成した。

(3) 生活時間調査 日曜を除いてふつうの日に2日間、所定の用紙に、母と子の両者の生活時間を記入してもらう。その中に、a) ひとりでよくあそぶ(母は仕事、読書などしている) b) 母に要求しながらあそぶ(母は相手をしながら仕事などする) c) ぐずる(母はほとんど子どものことにかかりきる)をわけて記録するようになっている。(時間単位15分)

結果

1 依存的行動および独立行動の各種得点の相互関係について

1) a 観察記録による依存性得点① 1分ごとに次の各項目について該当する行動があらわれた場合に、

* 本報告は、1958年と1959年の2期にわたってなされた研究をまとめたものである。

それを1と算えて集計した。依存性についての分類カテゴリーは次のとおりである。

- (1) 身体的接触(接触を求める。くつついている)
- (2) 近くにいることを求める(近くにいく、近くにいる)
- (3) 母親の助力を求める
- (4) 母親の注意をひく、みる
- (5) 泣く

b 観察記録による依存性得点② 母との交渉の多少によつて分類し、上と同様にして集計した。すなわち

- (1) 母との交渉なし
- (2) 母との交渉がときどきある
- (3) まったく母を相手にしている

c 観察記録による独立性得点 独立性は、遊び以外のことに気をとられないで、遊びに熱中する度合、その遊びによつて満足を得ている度合、内容の建設性、発展性を規準として評価した。方法は依存性の場合と同様であり、分類項目は下記のとおりである。

- (1) 何もしない。ぼんやりしている。くつついている
- (2) 他のことに気をとられながら遊ぶ
- (3) 熱中しているとはいえないが、何とか遊んでいる
- (4) 大たい一生けんめいに遊んでいる
- (5) 充実して遊び、他のことに気をとられず、熱中してあそぶ

このようにして分類してゆくと、依存性の少ない子どもは、30分間ほとんどひとりで遊び、逆に依存性の多い子どもは、30分間ほとんど母親から離れないという例もあつた。なお、6人分、3時間の記録について、2名の評価者が独立評価したところ、依存性については、依存性得点①の一致度は65.3%、依存性得点②は80.6%、独立性得点(遊びの構成度)は、一致度56.0、1段階のずれを許容すれば、93.3%であつた。

2) 質問紙による依存性、独立性得点 分布範囲の狭い項目を削除した後、得点の総和をもつて、それぞれ、依存性、独立性の得点とした。

3) 生活時間による依存性、独立性得点

母に要求しながら遊ぶ分数(b)と、ぐずる分数(c)との和をとり、依存性得点とし、ひとりで遊ぶ分数(a)をもつて独立性得点とした。そうすると、依存性の少ない子どもは、ぐずる時間が0のものから、多いものは3時間にわたり、母に要求しながら遊ぶ分数は、最低1時間から、最高8時間30分にわたる。また、ひとりで遊ぶ分数は、0から最高7時間30分にわたる。このようにして、2日間の平均をとり、時間分布を示すと Table 1.1, 1.2, 1.3 のとおりである。

Table 1. 1 ぐずる時間の分布

時 間	N
0	6
～ 30 分	6
～ 1 時間	7
～ 1 時間半	6
～ 2 時間	4
2 時間以上	1

(ねむくて母や他の人にぐずる, 母はせがまれて相手をしたり, ねせるために抱いたりおぶつたりする)

Table 1. 2 要求しながら遊ぶ時間の分布

時 間	N
2 時間以内	2
2 時間～ 3 時間	7
3 時間～ 4 時間	14
4 時間～ 5 時間	2
5 時間～ 6 時間	3
6 時間以上	2

(母や他の人に要求しながら遊ぶ, 母は仕事をしながら遊ぶ相手をする)

Table 1. 3 ひとりで遊ぶ時間の分布

時 間	N
1 時間以内	3
1 時間～ 2 時間	7
2 時間～ 3 時間	9
3 時間～ 4 時間	4
4 時間～ 5 時間	5
5 時間以上	2

(ひとりでまたは兄弟, 友達と遊ぶ)

Table 2. 1 依存性得点間の相関
(correlations between dependency scores)

依 存 性	観 察 ①	観 察 ②	生 活 時 間	質 問 紙
観 察 ①				
観 察 ②	.448*			
生 活 時 間	-.316	-.083		
質 問 紙	.068	.013	.400*	

観察①は依存行動の得点
観察②は母との交渉度による得点
* 5%以下の危険率で有意

Table 2. 2 独立性得点間の相関
(correlation between independence scores)

独 立 性	観 察
生 活 時 間	.028

Table 3 依存性と独立性の相関
(correlations between dependency and independence)

依 存 性	独 立 性	観 察	生 活 時 間
観 察 ①		-.109	
観 察 ②		-.240	
生 活 時 間			-.596**

** 1%以下の危険率で有意

以上の諸方法による依存性と独立性の得点の相互関係を列位によつて検討すると, Table 2. 1 および Table 2. 2 のとおりになる。

この表にみるように, 観察による依存性の2種類の得点の間および, 質問紙と生活時間表相互には, やや相関が認められる。すなわち, 生活時間表も質問紙も, ともに母親の家庭における状況判断によるものであり, その間には相関があるが, それと観察事態における依存性との間には相関関係は認められない。むしろ負の関係の傾向もある。

このことより, 家庭生活場面における依存性と, 観察場面における依存性とは, かなり条件が異なるものであると考えられる。

2 依存行動と独立行動との関係について

依存行動と独立行動とがどのような関係に立つかをみるために, それぞれの方法による依存得点と独立得点との列位相関をとると, Table 3 のようになる。この表にみるように, 生活時間では, 依存性と独立性との間には, -0.6 の相関が認められる。すなわち, 独立行動の多い子どもは, 依存行動が少ないという関係が, ある程度認められる。しかし, これは生活時間が24時間のわくによつて規定されていることを考えると, 依存性と独立性との関係は高いとはいえない。

観察場面においては, 依存性と独立性との間には, 相関関係は認められない。ゆえに, 依存性と独立性との間には, 大きな相関関係は認められないとする従来の諸研究の見解と一致する。

研究 I の結論と考察

1 1・2才児の幼児初期においては, 依存性と独立性に関して, かなりいちじるしい個人差を認めることが

できた。しかし、この個人差は、家庭場面と実験観察場面とではくい違いが生じた。これは、実験場面では、家庭場面にない人為的な要因が働いたためであろう。すなわち、ある母親は、家庭にいるときよりも子どもとの接触が多くなり、また、ある母親は家庭にいるときよりも子どもからの働きかけに対して応答が少なくなっている。その他、新しい事態における偶然的要因が働いて、実験場面においては、家庭場面とは違った様相を呈することになったのであろう。そこで、家庭で起こっているありのままのことを知ろうとするときには、実験的観察場面は不適当なものであり、むしろ母親の報告をもとにすることにより、妥当性のある結果を得ることができよう。そこで、次の研究においては、母親との面接による方法を用いることにしたのである。

2 独立性と依存性との間には、大きな相関関係は認められず、独立性と依存性とは両極概念ではないとする従来の研究の見解を支持することができる。

研究 II

目的： 前の研究により、依存性には個人差がいちじらしいことをみた。それでは、この個人差はどのようにして生ずるのであろうか。本研究においては、この点をさらに追求し、依存性と親の養育態度との関係を明らかにし、あわせて親に対する従順性との関係をみようとするものである。

仮説： 最初に考察したことをもとにして、親の養育態度と依存性との関係について、次の2点を仮説として考えた。

1 親が依存行動を許容し、受け入れることにより、依存の欲求は強化されるであろう。すなわち、依存の欲求が成立するには、子の欲求が親によつて充足されて強化されねばならず、そのようなときには、子どもはある程度依存的になる。

2 依存の欲求が一度成立した後には、その欲求の強さは、そこであたえられる罰の強さによる。すなわち、罰が大であり、フラストレーションが大であるならば、依存の欲求は強くなるであろう。このことは最初にみたように、Gewirtz, J. L. や Hartup, W. W. により実験的研究によつて主張されているところであり、Sears, R. R. も面接調査において、同様の結論を得ている。本研究においては、2・3才の幼児について、親との依存関係が最も顕著であり、他の要因の比較的単純なこの時期において、上の点を検討し、親の態度との関係を明らかにしようとするものである。さらに、依存性を生む親の態度と関係の深い、親に対する従順さ (compliance)

または反抗度との関係について、次の仮説を考えた。

3 依存行動の許容度および、依存の度合は、親の禁止や命令に対する敏感さ (又は反抗度) と関係がある。すなわち、依存行動の許容度が大であると、親に対する従順の度が大きくなり、逆に、依存行動の許容度が小であると、親に対する反抗の度が大きくなるであろう。すなわち、親の承認や賞讃をうけること自体が欲求となつているときには、親の承認や賞讃に対して敏感となり、それを失うことを恐れて、親に対して従順になるであろう。それに対して、親が依存の欲求を拒否するときには、親の承認や賞讃は子どもにとつて大きな意味をもたなくなり、子どもは自己の目標を追求する。それが親の目標や規準と矛盾するときには、子どもは反抗とよばれるような行動をするであろう。

とき： 1959年1月～5月

被験者： 研究Iの幼児19名と、2年前の乳児の研究のときの被験児20名、計39名。年令、2才3か月～3才8か月で、男児23名、女児16名となる。したがって、いずれも、1年または2年前に少なくとも1度は面接したことのあるもので、ある程度研究者としたい関係にある、それゆえに、レポートがだいたい成立しているとみてよい。

方法： 半構造化した標準面接法 別紙に示すような標準面接項目にしたがつて、1名約1時間にわたり、面接を行なう。1名が面接者、他の1名が記録者となる。なお、記録の正確さをおぎなう意味で、テープ・レコーダーを使用した。10枚の用紙にわたる面接記録をもとにして、49項目について、5段階評価を行なつた。

評価の信頼度： はじめ、7名の被験者について、2名の評価者が相談して慎重に検討し、各項目について、5段階に評価し、各段階の内容の概略を作つた。その後、全部の被験者について評価し、約3週間を経てから、全部再評価を行なつた。その結果、一致度の平均は64.5%で高いとはいえないが、1段階のずれを許容すると、一致度は97.3%であり、この種の標準面接法が、ある程度信頼できることを示している。

結果

1 罰の厳しさ、依存行動の許容度および、依存性と従順性との関係について

親の態度として、罰の厳しさと依存行動の許容度との2つの変数を取り、子どもの行動として、依存度と親に対する従順性の2つの変数を取り、その相互関係を見た。それぞれの評価項目の内容は次のとおりである。

罰の厳しさ——⑱ 親に対する攻撃の禁止の度合 (5親をぶつたり、ばかといつたりするとそれを厳しく禁止

する——1 ぶつたり、ばかと云つたりしても、それを許容する) ⑭ しつけ一般の罰の厳しさ (5 しつけのいろいろの場面で非常に厳しい——1 しつけは厳しくない) ⑳ 母親の体罰の度合 (5 よく体罰を加える——1 体罰はまったくしない) ㉑ 父親の体罰の度合 (上に同じ) ㉒ 排泄のしつけにおける罰の厳しさ (5 排泄をしくじるとひどく叱つたりたたいたりする——1 排泄を失敗してもだまつてかえたり、ちよつとたしなめる程度) ㉓ 壁に絵をかくことの禁止の度合 (5 壁にらく書きするときつく叱つたりたたたく——1 まつたく禁止しないでやらせておく)

依存行動を許容する度合——⑫ 依存行動に対する親の態度 (5 依存行動を示したときに、それを受入れてやる——1 子どもが依存行動を示しても受入れず、厳しく叱る) ⑬ いつしよに遊ぶ時間 (5 1日に2時間以上子どもと遊ぶ時間をつくる——1 子どもと遊ぶ時間はまつたくつくつていない) ⑭ 睡眠のさいの母子の接触度 (5 ねるときに、母がいつも傍についており、夜も添い寝する——1 ねるときに母はそばにまつたくついていない) ⑮ 抱く度合 (5 よく子どもを抱く。要求されなくても抱いてやることが多い——1 ほとんど抱くことはない)

依存性の度合——⑧ 身体的接触度 (5 子どもは母親にくつついて困る——1 子どもが母にくつつくことはほとんどない) ⑨ 親の注意をひく度合 (5 子供は始終親の注意をひいてうるさい——1 親の注意をひくことはほとんどない) ⑩ 留守居の抵抗 (5 母が外出するときには、いつもあとを追う——1 母のあとを追うことはまつたくない)

従順性の度合——⑮ 自己主張 (5 親のいうことをきかないで反抗したり、自分のしたいことをいい張ることが多い——1 親に反抗することはほとんどない) ⑯ 親に対する攻撃性 (5 親をぶつたり、ばかといつたりすることが多い——1 親を攻撃することはまつたくない) ⑰ 親の禁止に対する鋭敏性 (5 親の禁止に対していうことをきかない、反抗することが多い——1 親の禁止に対してよくいうことをきく、叱るとすぐにべそをかく)

以上4種の得点について、その列位相関をとると、Table 4.1 のとおりである*。

1) 罰の厳しさに関係のある要因 罰の厳しさは、

* 列位相関は次の式を用いた。

$$r_{S} = \frac{\frac{1}{6}(n^3 - n) - \sum d^2 - T' - U'}{\sqrt{\frac{1}{6}(n^3 - n) - 2T'} \sqrt{\frac{1}{6}(n^3 - n) - 2U'}}$$

Table 4. 1 罰の厳しさ、依存性許容度、依存性、従順性の相関 (correlations between punitiveness, acceptance of dependency, dependency and compliance)

	罰の厳しさ	依存性許容度	依存性	従順性
罰の厳しさ				
依存性許容度	-.69**			
依存性	-.03	.12		
従順性	-.65**	.49**	-.09	

** 1%の危険率で有意

Table 4. 2 罰の厳しさと依存性の許容度 (punitiveness and acceptance of dependency)

依存性許容度	罰の厳しさ			
	大	中	小	計
大	1	4	11	16
中	6	3	1	10
小	10	3	0	13
計	17	10	12	39

Table 4. 3 罰の厳しさと従順性 (punitiveness and compliance)

従順性	罰の厳しさ			
	大	中	小	計
大	2	2	8	12
中	5	7	4	16
小	10	1	0	11
計	17	10	12	39

Table 4. 4 依存性許容度と従順性 (acceptance of dependency and compliance)

従順性	依存性許容度			
	大	中	小	計
大	8	2	2	12
中	8	4	4	16
小	0	4	7	11
計	16	10	13	39

Table 4. 5 罰の厳しさと依存性 (punitiveness and dependency)

依存性	罰の厳しさ			
	大	中	小	計
大	6	4	4	14
中	6	3	4	13
小	5	3	4	12
計	17	10	12	39

依存行動の許容度と関係がある。それぞれの変数について、さらに大中小、3群にわけて比較すると、Table 4. 2のとおりである。すなわち、罰の厳しさが大きいものは、依存行動の許容度小さいものが多く、罰が厳しくないものは、依存行動を許容するものが多い。この2つの親の態度には密接な関係がある。

また、罰の厳しさは、従順性と関係がある。Table 4. 1およびTable 4. 3にみられるように、罰の厳しき大のものは、従順性が小であり、罰の厳しき小さいものは従順性が大である。

2) 依存行動の許容度に関係のある要因

Table 4. 1 および Table 4. 4 にみられるように、依存行動の許容度が大きいものは、従順性が大であり、依存行動の許容度小さいものは、従順性も小である。

3) 依存性と関係のある要因 Table 4. 1 および Table 4. 5 にもみられるように、依存性の度合と親の態度の2つの変数の間、ならびに、依存性の度合と従順性の間には、明瞭な関係が認められないように見える。ところが、次に親の態度の2つの変数と、子どもの行動

の2つの変数それぞれについて大小2群にわけ、その組み合わせ16種について分析してみると、この間に一定の傾向があることが示される。この関係は Fig. 1 にみるのとおりである。

この図に明瞭に示されるように、全被験者の 2/3 以上が、4つの群に分布し、他の組み合わせに属するものは、1, 2例ずつにすぎない。すなわち、

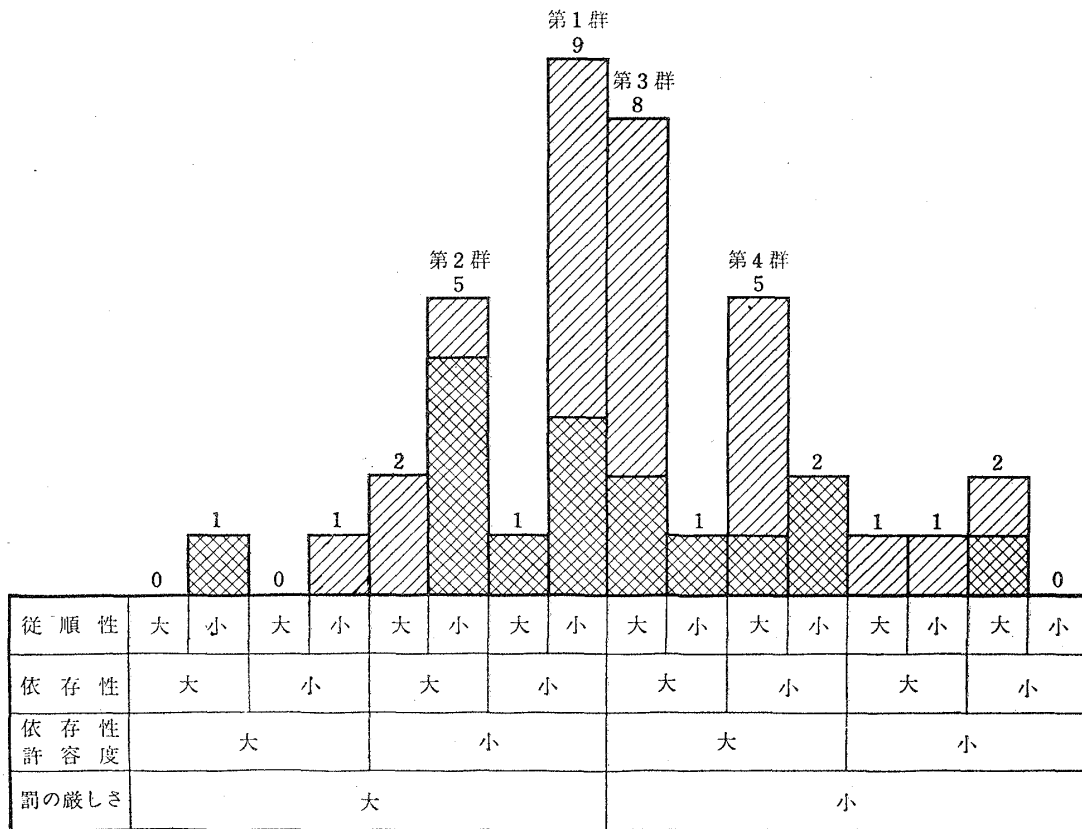
第1群——罰が厳しく、依存行動の許容度が小であり、したがって、依存性も小で、従順性も小（反抗性は大）さいものである。

第2群——罰が厳しく、依存行動の許容度は小であるが、仮説2に合致して、依存性は大となり、従順性は小さいもの。

第3群——罰の厳しきは小で、依存行動の許容度は大であり、したがって、仮説1のように、依存性も大で、従順性も大きいもの。

第4群——罰の厳しきは小で、依存行動の許容度は大であるが、依存性は小であり、しかし、従順性は大きいもの。

Fig. 1 罰の厳しき、依存性許容度、依存性、従順性の関係 (types of dependency)



図中 線は女兒を示す

ここにみるように、依存性が大きいものの中には、依存行動が強化されるために依存度大なるものと、逆に依存の欲求に罰があたえられるために依存度が大なるものと両方がふくまれているので、Table 4. 1, Table 4. 5ではこの関係が明瞭にあらわれなかつたのである。また依存度が小さいものの中には、依存の欲求が充足されるために依存度の小さいものと、最初から依存の欲求が強化されないために、依存度が小さいものとがふくまれている。

そして、従順性の大小は、依存度の大小にかかわらず、罰の厳しさと依存行動の許容度とに関係している。このことは、依存性の発生に2種類あることを、そしてそれにしたがって、依存性にも相異があることを考えるならば、むしろ当然であろう。

最初に仮説1に示したように、親が依存的行動を許容し、受け入れることにより、依存の欲求は強化され、依存性が高くなることは、第3群によつて示され、その逆の関係は、第1群によつて示されたことになる。また、仮説2に示したように、依存の欲求が一度成立した後は、その欲求の強さは、そこで与えられる罰の強さに依存することは、第2群によつて示されたことになる。また、仮説3に示したように、依存行動の許容度が大であると、親に対する従順の度が大きくなり、逆に、依存行動の許容度が小であると、親に対する反抗の度が大きくなるであろうということ、第1群から第4群まですべての群について示されている。

年令、性差および、出生順位の検討 年令と、上に掲げた4種の変数との間には、はつきりした関係は認められなかつた。2才から半年の間隔において検討してみると、最年少群である2才～2才半の群において、罰の厳しさは、依存行動の許容度大である傾向が認められるが、全体としてみると、年令傾向は一義的でない。年令と依存性との関係は、Table 5. 1にみられるように、年令が小さいものは依存性大であり、年令の大きいものには依存性小であるような傾向がある。列位相関は.27である。また、1年前の依存性の資料（研究Iの資料）と共通の被験者19名について、昨年と今年との変化を検討すると、Table 5. 2のとおりで、その変化には明瞭な方向は認められなかつた。また、前に述べた類型との関係があるだろうと思われるが、この範囲の例数では認めることはできなかつた。

性差にも明瞭な傾向は認めたいが、依存行動の許容度が男児に大であり、女児に従順性小である傾向がある。また、Fig. 1における第2群は女児に多く、第4群が男児に多い傾向がある。

Table 5. 1 依存性と年令
(dependency and age)

年令	依存性		計
	大	小	
2; 0 ~ 2; 6	7	6	13
2; 6 ~ 3; 0	8	6	14
3; 0 ~ 3; 6	0	5	5
3; 6 ~ 4; 0	4	3	7
計	19	20	39

Table 5. 2 昨年の依存度と本年の依存度との関係

本年の依存度	昨年度の依存度		計
	大	小	
大	4	5	9
小	5	5	10
計	9	10	19

(昨年の依存度の大小は、生活時間をもとにしている)

出生順位についてみると、第1子26名、第2子13名であり、依存性との関係はみとめられなかつたが、第2子に罰の厳しさが小のものが多い傾向がある。また、第2子13名の中、10名が従順性大であり、従順性が小のものは少ない。

2 乳児期の育児態度と、依存性との関係について

被験児39名中、20名が、2年前の乳児期に、母親と面接し母親の育児態度ならびに子どもの発達状態について調査した* のと同じ被験者であるので、乳児期における母親の子どもとの接触度と、2～3才の現在、乳児のこのことを思い出して報告してもらつた乳児期の母子の接触度(⑩ 乳児期の母子の接触度、5 いつもいつしよ、抱いたりおぶつたりすることが多い—1 いつもほとんどひとりにしておく)とを比較してみると、Table 6. 1 のとおりで、2～3才時の記憶によるものと、乳児期の実際の調査とはよく一致している。そこで、全被験者について、現在時調査における乳児期の母子の接触との関係をみると、Table 6. 2, Table 6. 3にみるように、乳児期の母子の接触と罰の厳しさおよび依存性との間には関係は認められない。(依存行動の許容度との間にも関係は認められない。表省略)

前に、わたくしどもの乳児期の研究において、乳児期に母子の接触が大きいと、乳児の精神発達は良くなることをみたのであるが、乳児期に母子の接触度が大きであっても、それは幼児期において、かならずしも依存性を大

* 津守・稲毛 (1958)

Table 6. 1 乳児期の母子の接触について乳児期の資料と幼児期の記憶による資料との関係
(Reliability of mother's report in relation to mothering at infancy)

記憶による資料	乳児期の資料		計
	大	小	
大	11	2	13
小	0	8	8
計	11	10	21

Table 6. 2 乳児期の接触と罰の厳しさ
(Mothering of infancy and punitiveness)

罰の厳しさ	乳児期の接触		計
	大	小	
大	10	7	17
中	3	7	10
小	6	6	12
計	19	20	39

Table 6. 3 乳児期の接触と依存度
(Mothering at infancy and dependency)

依存度	乳児期の接触		計
	大	小	
大	8	6	14
中	5	8	13
小	6	6	12
計	19	20	39

大きくすることにはならないことが、ここに明らかにされたことになる。

研究Ⅱの結論と考察

依存性の大なるものには、依存性の許容度が大きで罰の厳しさが小さいものと、罰が厳しく依存性の許容度も小であるものと2種類ある。また、依存性の小さいものにも、罰が厳しく依存性の許容度が小さいものと、依存性の許容度が大きで罰の厳しさが小さいものと2種類ある。そして、いずれの場合にも、罰が厳しく依存性の許容度が小さいものは、従順性小であり、罰の厳しさが小で依存性の許容度が大きであるものは、従順性大であるものが多い。そこで、最初に掲げた仮説はいずれも証明されたことになる。

また、乳児期の接触度は幼児期の依存性とは無関係であり、乳児期に母子の接触が大きくても、かならずしも依存性が大になるとは限らず、乳児期の接触が小さくても、

依存性が小になるとは限らないことも明らかになった。

これらの関係をもう一度発達の観点から考察してみよう。乳児が空腹になつて泣くと、母親が近寄り、抱き上げて、乳を与える。乳児は満足する。この経験がくり返されると、母親そのものが欲求の対象となり、依存性が発達する。乳児期に母子の接触が大であると、依存性はより発達しやすいであろう。生後半年くらいまでに、依存の欲求が発現するが、生後1年目の後半になると、乳児は積極的に外界を探索するようになる。わたくしどもの乳児の研究*において、母子の接触の大きいものは、母親は子どもの探索行動に対して寛容であり、子どもはより積極的である傾向がある。ここに、独立的行動が発生する。ここで独立的行動に制限を加えるならば、独立性は低くなる。そして、独立行動に制限を加える親は、母子の接触が大きいものもあるが、母子の接触の小さいものも多い。すなわち、依存度の低いものも多い。ここでも依存性と独立性とは両極概念ではないことを見ることができる。

依存性が発達し、その依存的傾向が許容され、罰も小さいときには、子どもの依存性はいつそう強くなる。また、その逆に、依存の欲求は解消して、依存性は小さくなる場合もある。そこにどのような条件が働いているのかは、この研究では明らかでない。しかし、そのいずれの場合も、子どもは親に対して従順であり、親の禁止に対して敏感である。ここに super-ego の発達の基盤をみることができるのではなからうか。

乳児期に母子の接触が少ない場合には、子どもに依存の欲求が発達しないこともある。また、依存の欲求が成立した後、依存の欲求が拒否され、罰が加えられると、依存の欲求はいつそう強くなる。しかし、その罰がさらに強くなると、依存行動はすべて禁止され、依存性は小となるであろう。本研究において、依存性の許容度が小で、罰の厳しさが大きであるものは、依存性の大きいものと、小さいものがあるが、上の諸条件によるものである。いずれの場合も、親に対する従順性は小さく、反抗度は大である。

ここに、依存性の大きいものにも、発生起因が2種あることを認めたのであるが、おそらく、その依存性は質的に異なるものをもっているであろう。本研究においては、Fig. 1 にみられるように、依存性の大きいもの、小さいものそれぞれについて、2種ずつの類型を親の態度および従順性との関連において明らかにしたのである

* 津守・稲毛 (1958)

が、そのいずれに属するかによつて指導の方法もかわるのであろう。また、上の4類型に属さないものについてみるならば、それぞれ特殊な条件が働いているものが認められるのであるが、詳細は、今後の研究にまたなければならぬ。

要 約

この研究は2つの部分より成る。研究Ⅰにおいては、実験場面における観察と、質問紙と生活時間調査とにより、1, 2才児の依存性の個人差を明らかにし、依存性と独立性とは両極概念ではないことを示した。研究Ⅱにおいては、面接調査法により、親の態度と子どもの依存性、従順性を分析評価し、依存性の大きいものには、罰の厳しさ大で依存性の許容度小さいものと、罰の厳しさは小で依存行動に対しても寛容なものがあることを明らかにした。また罰が厳しく依存行動に対して厳格にしているものは、従順性が小であり、逆に、罰が厳しくなく依存行動が受け入れられているものは、従順性が大であることを明らかにした。また、乳児期の母子の接触が多いことが必ずしも依存性を大きくするとは限らず、母子の接触が少ないことがかならずしも依存性を小にしているとは限らない。

文 献

- (1) Ausubel, D. P. : *Theory and problems of child development*. Grune and Stratton, N. Y., 1958.
- (2) Beller, E. K. : Dependency and independence in young children. *J. genet. Psychol.*, 1955, 87, 25—35.
- (3) Beller, E. K. : Dependency and autonomous achievement striving related to orality and anality in early childhood. *Child Developm.*, 1957, 28, 287—315.
- (4) Gewirtz, J. L. : Three determinants of attention-seeking in young children. *Monogr. soc. res. Child Developm.*, 1954, 2(Serial 59) pp. 48.
- (5) Gewirtz, I. L. : A program of research on the dimensions and antecedents of emotional dependence. *Child Developm.*, 1956, 27, 205—221.
- (6) Gewirtz, J. L. : A factor analysis of some attention seeking behaviors of young children. *Child Developm.*, 1956, 27, 17—36.
- (7) Gewirtz, J. L. & Baer, D. M. : The effect of brief social deprivation on behaviors for a social reinforcer. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 56, 49—56.
- (8) Gewirtz, J. L., Baer, D. M. & Roth, C. H. : A note on the similar effects of low social availability of an adult and brief social deprivation on young children's behavior. *Child Developm.*, 1958, 29, 149—152.
- (9) Gewirtz, J. L. & Baer, D. M. : Deprivation and satiation of social reinforcers as drive conditions. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 57.
- (10) Hartup, W. W. : Nurturance and nurturance-withdrawal in relation to the dependency behavior of preschool children. *Child Developm.*, 1958, 29, 191—201.
- (11) Heathers, G. : The adjustment of two year-olds in a novel situation. *Child Developm.*, 1954, 25, 147—157.
- (12) Heathers, G. : Acquiring dependency and independence. A theoretical orientation. *J. genet. Psychol.*, 1955, 87, 277—291.
- (13) Sears, R. R., Whiting, J. W. M., Nowlis, V. & Sears, P. : Some child rearing antecedents of aggression and dependency in young children. *Genet. Psychol. Monogr.*, 1953, 47, 139—236.
- (14) Sears, R. R., Mccoby, E. E. & Levin, H. : *Patterns of child rearing*. Row, Peterson and Co., 1957.
- (15) Smith, H. T. : A comparison of interview and observation measures of mother behavior. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 57, 278—282.
- (16) Stendler, C. B. : Critical periods in socialization and overdependency. *Child Developm.*, 1952, 3—12.
- (17) Stendler, C. B. : Possible causes of overdependency in young children. *Child Developm.*, 1954, 25, 125—146.
- (18) 津守真, 稲毛教子 : 乳児の精神発達に及ぼす育児態度の影響, 教育心理学研究, 1958, 5, 208—218.
- (19) 津守真, 稲毛教子 : 質問法による乳幼児精神発達検査 第23回日本心理学大会抄録, 1959.

面接質問用紙抄

- 1 子どもさんは、このごろ、どんなことをして遊んでいますか。
- 2 子どもさんは、だれと遊びますか。
 - a いくつぐらいの子どもですか。

毎日遊びますか、ときどきですか。

どんなことをしてあそびますか、

- b お母さんは、子どもさんに、外にいつて他の子どもと遊ぶことをすすめますか。それとも、ひとりで遊ぶようにすすめますか。
- c 子どもさんは、他の子どもと遊んでいていじめる方ですか、いじめられる方ですか。
- d そのとき、お母さんはどうしますか。
- 4 子どもさんは、お母さんにくつついて困ることはありますか。
- a ひとりで遊ばせようとしても、親に話しかけたり遊んでもらおうとして、うるさくつきまといますか。そういうことは、1日にどのくらいありますか。
- b 子どもさんが遊ばないでおとなにくつつきまわつたり、要求したりするのは、どういうときが多いですか。
- c 当然自分でできるのに、助力を求めることはありますか。
- d お母さんが外出して、子どもさんをだれか他の人と留守番させようとするとき、子どもさんはどうしますか。
- e 以前はこのような傾向がありましたか、現在と比較してどうですか。
- 5 子どもさんがうるさくくつつくときにはお母さんはどのようにしますか。
- a 子どもさんを叱りますか、または、かまわないことが多いですか。
- b お母さんは、子どもさんといつしよに遊んで楽しむ時間をつくりますか。
- c 子どもさんが、だっこしてというときだっこしてやることが多いですか。だっこしてといわないときでも、だっこすることは多いですか。
- 6 子どもさんは、いうことをきかなかつたり、乱暴したりすることは多いですか。
- a どういうときに反抗することが多いですか。
- b 子どもは、時に、親に対してぶつたり、けつたり叫んだりしますが、あなたのお子さんは、どの程度そのようなことをしますか。
- c 子どもさんがそのようなことをしたとき、お母さんはどうしますか。どの程度許しますか。
- 7 子どもさんがいうことをきかないときは、お母さんはどうしますか。
- a どのくらいぶちますか。
- b お父さんはいかがですか。
- c 押入れにいれたり、外に出したりして叱ることも

ありますか。

- d お母さんはしつけの方法として、どんな方法をつかいますか。
- 8 こんどは、子どもさんがいけないことをしたとき、どのようにふるまうか知りたいと思います。たとえば子どもがなにかいけないこと、困ることをしているとき、お母さんがふり向いたとしたら、子どもさんはどのようにするでしょう。
- a いけませんといわれるとすぐにいうことをきいてやめますか。
- b いけませんといわれると泣き出しますか。
- 10 次に排泄のしつけについてうかがいましょう。
- a 子どもさんは、いつおしつこのしつけをはじめましたか。
- b それはどんなぐあいになりましたか。
- c いつからたいがい知らせようになりましたか。
- d だいたいしつけができた後、そそうをしたときにはどうしましたか。
- e おねしようをしたときにはどうしますか。
- 11 清潔、整頓のしつけはどんなぐあいですか。
- a 必ず食前に手を洗わせますか。
- b おもちやのあと片づけをさせますか。
- c 壁に絵を書いたりしたときはどうしますか。
- d いすの上をとびまわつたりしたときは注意しますか。
- 12 睡眠については、
- a 夜ねにゆくとき、ひとりで行きますか。そばについてやりますか。どこでねますか。
- b 寝てしまつてから後で、夜中に親のふとんの中に入りたがつたら、それを許しますか。
- 13 こんどは、赤ちやんのときのことを伺いましょう。
- a お母さんは、お子さんが生まれてから今までお子さんとはなれた生活をしたことがありますか。
- b お父さんはいかがですか。
- c 御両親以外に、子どもの世話をした人はいますか。その人は子どもに対してどんな態度で接していましたか。
- 14 すこし御意見を伺わせていただきます。
- どんな赤ちやんでも泣くものですが、あるお母さんは、赤ちやんが泣くたびに抱くと赤ちやんを甘やかすといいますが、また、ある人は、赤ちやんを長い間泣かせてはいけないといいますが、あなたは、このことをどのように思いますか。
- a あなたのお子さんについてはどうしましたか。
- b 夜中に泣いたときにはどうしましたか。
- c あなたは赤ちやんをよくだっこしてやりましたか。

以下 15. 16. 17 省略

(1959年7月30日原稿受付)